

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530844

研究課題名（和文） 高等教育における留学生支援の枠組みに関する国際比較研究

研究課題名（英文） Comparative Study of the Theoretical Framework of International Student Support in Higher Education

研究代表者

高橋 彩（TAKAHASHI AYA）

北海道大学・国際本部留学生センター・准教授

研究者番号：10326788

研究成果の概要（和文）：

高等教育のグローバル化における留学生支援の政策上の議論および個別の大学における具体的な支援サービスの検討に資するため、イギリス、カナダ、オーストラリア、日本の留学生支援の状況を調査し、その特色や傾向を考察することを通して、留学生支援の理論的枠組みの構築を試みた。比較の視点による各国、各大学現場で行われている実際の支援の分析から、留学生支援の三つのベクトルからなる三次元空間を見出した。

研究成果の概要（英文）：

This research project aimed to improve international student support in higher education in the field of policy making as well as at individual universities. It examined international student support at higher education institutions in the UK, Canada, Australia and Japan and attempted to construct the theoretical framework of international student support through an analysis of the features of student support in the four countries. Based on the results of this project, a three-dimensional theoretical framework was developed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：高等教育・高等教育政策・留学生支援・国際交流

1. 研究開始当初の背景

当研究は、日本における留学生支援の意味と位置づけをめぐって、以下のような問題意識を持っていた。

- (1) 日本の留学生政策は、高等教育のグローバル化の中で、その方向性と戦略を問われている状況にある。そこには、積極的に具体的な留学生支援の検討も含まれ

る。

- (2) 留学生は言語や文化の壁を越えて移動する学生だが、日本における外国人留学生の受入れにおける支援の具体策について、(1) の状況を鑑みた議論が十分であるとは言えない。
- (3) 国の政策や大学の教育目的と連動した受入れ留学生支援を模索・検討する必要があるのではないか。

2. 研究の目的

本研究は、1. で示した問題意識をもとに、今後の留学生支策の検討における、視野の広い議論に資する理論枠組みの構築を試みるものである。具体的には、以下の研究を行った。

- (1) 英国（以下、イギリス）、カナダ、オーストラリアの大学における留学生支援の状況から、各国、各大学の支援の傾向や特徴を明らかにする。
- (2) その上で、日本における留学生支援の実態を、これらの国々との比較の視点で調査し、その特徴を分析する。
- (3) 留学生支援の体制作りを資する理論的枠組みの構築を試みる。

3. 研究の方法

イギリス、カナダ、オーストラリア、日本4カ国の留学生支援の状況を、文献調査、インターネットで提供されている各国の留学生教育に関する情報、各大学の学生やサービスに関する基本情報、留学生支援の実態についての現地訪問（大学関係者との面談、支援の現場の見学、現地での資料収集を含む）を通して調査した。

大学関係者との面談では、留学生支援について研究者間である程度の質問項目を検討したものから、調査先大学の状況と各研究者の関心領域に応じて適宜選択し、面談の際に用いた。

収集した情報から各国の留学生支援の特色や方向性を考察した。各研究者がそれぞれ海外の一国を担当したが、各国の留学生政策や受け入れの実態は同じ条件下で比較することは困難であること、支援の範囲は奨学金、住居、問い合わせ窓口の状況から心理的カウンセリング、大学の危機管理体制まで多岐にわたるため、キャリア支援やオリエンテーション等、各研究者がテーマを絞って、考察することとした。

なお、海外調査については、イギリスを高橋、カナダをフィルコラ、オーストラリアを青木が担当した。また、日本については、各研究者とも情報収集等を行ったが、大学調査については主に高橋と青木が行った。日本での調査は、海外での調査結果をもとに、日本における先進的で特徴的な支援を中心に調査した。

4. 研究成果

(1) 調査の意義

当研究は、増大する留学生受入れにおける支援を充実させるためだけではなく、グローバル化する高等教育市場における日本の留学生政策の中で、「支援」をいかに位置づけるかを考えるための基礎研究である。政策に

連動する、あるいは有効な「支援」の方策を検討するための議論に資する理論的枠組みの構築を試みた。

よって、「留学生30万人計画」下における留学生増に対する留学生支援の充実を目的とした検討というよりはむしろ、グローバルに移動する学生に対し、大学の現場で、限られたスタッフ・資源等の中で、いかに効果的な支援できるか、という具体策を念頭に置きながら、研究を進めた。

海外調査の対象としたイギリス、カナダ、オーストラリアという、英語圏で留学生受入れの先行国は、ある意味で成熟した、あるいは先進的な受入れ支援を行っていると考えられた。また、基本的に教育・研究言語と現地の生活言語が同一の国での留学生支援において、言語サポート以外の留学生支援のすがたを見ることができると考えた。

大学への訪問は当研究に不可欠な部分であった。留学生の支援では、国レベルの政策において何が重視されているかを検討することは必要だが、同時に実際の対人サービスとしての留学生支援の現場で、何が行われているかを把握することが肝要である。

また、支援では、提供されているサービスの種類、提供範囲・程度を知ることは必要だが、実際にどのような部署で、どのような方法や流れの中で、当該サービスが行われているのかを把握することが、その意味を考えるために重要だと考えた。

当研究は、日頃留学生教育・支援に携わる担当者としての研究者が、国際的な潮流、国の政策、個別の大学の状況と教育・支援現場の現実が必ずしも単線的に議論できないことの認識を持って開始された。

(2) 調査結果

『北海道大学留学生センター紀要』(2012)の特集論文として掲載された、三名の研究者（高橋、フィルコラ、青木）の論文をもとに、またそこでは述べられなかった情報も加え、当研究の結果と意義を以下に述べる。

各国の大学の現地調査からは、留学生支援に携わる人々の工夫が見られた。それは、オリエンテーションの回数や時期、関係者の連携、留学生の目線に立った情報提供、相談のしやすさへの配慮、各専門部署へのつなぎ等多岐にわたる。

また、支援担当者の留学生の福祉への思いや業務量との相克等、現場の支援を形づくる様々な要素も見えてきた。例えば、（非教員である）留学生担当者のプロフェッショナルリズムや国の施策の下に要求される留学生担当者としてのデスクワークの増大と対人サービスとしての留学生支援のバランス等である。

さらに、客観的な記述や計量的に測ること

こそできないが、そのサービスが提供されている現場の温かさ、あるいは活気等の雰囲気を感じることもあった。これは、支援が決して国の政策や大学の方針だけでは完成されないものであることを意味している。

国際比較の視点で見ること、当該国の政策下や文化の中では自明のように見える各支援策も、そこでの当初の意図以上の意味を持って浮かび上がってきた。

たとえば、イギリスにおける「留学経験の質」向上への動きの中では、渡英前から滞在中の言語や生活に関するサポート、学生生活のフィードバックまで、大学生活の諸局面でのサービス向上に関心がはらわれる一方、現場ではその質の向上を担う職員によるプロフェッショナルな支援が見受けられた(5. ①: 高橋、2012)。留学生政策における「経験の質」への注目は、単に充実した学生支援という見方では把握しきれない。

カナダにおける留学生へのキャリア支援に見られる近年の動きは(5. ②: フィルコラ、2012)、日本での大学・国レベルでの留学生への就職支援の状況と比較しながら見ると、その移行の速さを捉える事ができ、国際的な潮流への対応の違いを垣間見ることができる。

オーストラリアでは政策の上で留学生の福利充実が掲げられており、大学での新入留学生に対する手厚いオリエンテーションには、学生の多様な言語・文化背景やニーズに対応しようとする姿勢が見られるという(5. ③: 青木、2012)。これは、ベスト・プラクティスや当該国の大学文化という見方では十分に把握することができない特色であろう。

日本においては、周辺小中学校への協力を含む留学生の地域との交流が、留学生にとっての日本社会理解や異文化交流等、広義の教育の提供という意味をなす事例が見受けられた(5. ④: 高橋、2012)。大学を中心とした、あるいは大学がハブとなる留学生の地域との交流が比較的重視されてきた日本の大学では、学生の社会貢献や大学の通常地域貢献の一環としての「地域との交流」以上の意味を持つことを再認識できる。

なお、本研究では、現場の支援の検討に資することを目的としているため、これらの研究成果の一部について留学生支援担当者を中心に報告する機会を持った。2012年度には、イギリスとオーストラリアの留学生支援について、北海道地区留学生担当教職員連絡会議のプレセッションとし、地域の留学生担当者に報告した。また、前年度には研究の途中経過について所属機関内で勉強会の機会を持った。

(3) 理論的枠組みとして

本研究では、支援のかたちや実態を国別、あるいは大学別にカテゴリ分けするのではなく、実践されている様々な支援を鳥瞰することで、個々の支援や支援のある局面の持つ性格から、三つのベクトルによる特色・方向性を見出した。

このベクトルからなる三次元空間については、『北海道大学留学生センター紀要』の特集論文の結論部分(④: 高橋、2012)で論じており、以下はその概要である。

一つ目は「標準化ベクトル」である。これは留学生を現地の大学教育のシステムや教育文化に同化させようとする傾向を持つものである。このとき留学生支援は全学の学生支援サービスに連動する方向性を持つと考えられる。

二つ目は「多様性・顧客対応ベクトル」である。移民が多い多民族国家が発展させてきたものであり、現地学生が多様な国籍、言語背景を持つ学生からなる国では、留学生に対応しようとする前提として多様性に対応しようとする環境がある。つまり、もともと多様な文化・ニーズに柔軟に対応しようとする支援の方向性である。

最後は「多文化交流ベクトル」である。日本のように、留学生を大学・地域社会に多様性をもたらす存在であることを意識し、交流の空間や機会を積極的に設けることで、異文化接触を通じた教育・支援機会を提供しようとするものである。

これらのベクトルがかたちづくる三次元の空間の中に、ある大学の留学生支援が位置づけられると結論付けた。ベクトルは三名の研究者の共通見解として完成されたものではないが、少なくとも留学生支援の質と量、形態が各大学において異なるべきであり、どのような方向性を持って具体策を考えるかが重要であることを認識している。

日本の留学生支援では、英語圏の大学と異なり、必ずしも学習・研究言語が現地語である日本語ではない。日本の高等教育の「国際標準化」が求められる中で、教育・研究言語と生活言語が異なる留学生が増大することを踏まえた対応が必要である。

「国際化」する日本の大学キャンパスでは、「顧客」としての学生からのニーズが高まる傾向にあるが、日本の大学に求められるのは、単なるキャンパスのバイリンガル(日・英二カ国語対応)化と同義の「国際化」ではなく、留学生教育への方針の検討にもとづいた、支援サービスの提供であろう。

留学生支援は、大学における狭義の「教育」という枠組みの中では検討しきれない、大学の重要な教育サービスの一局面である。イギリスやオーストラリアで語られている留学生の経験の質という考え方からは、学生生活を支える留学生支援が、広義の「教育」に不

可欠な部分であることが浮かび上がってくる。

なお、「多文化交流ベクトル」は、前述のように留学生支援の枠におさまるものではなく、留学生と現地学生、あるいは地域に対する教育的活動という意味合いを持つ。近年、キャンパスの国際化とともに、教室内の多文化化が進んでいるが、「授業」という設定の中で、多文化交流の効果を考える際にも、この枠組みにおける議論が貢献できる部分があるだろう。

(4) 課題と展望

当研究では、支援の方策を検討するための大きな枠組みを構築することを目標としたことから、研究にはいくつかの限界があった。

まず、支援方策の人員、資金を含む支援サービスを提供するための条件と各サービスの目標や効果の考察は当研究では行わなかった。また、各国の支援の状況を網羅的に調査したわけではないことから、国別の支援の型を分析することはできなかった。さらに、各研究者が焦点を当てた支援の分野が各国で異なっていたことから、当該分野におけるより精緻な比較分析ができなかった。これらは、当研究の当初の目標には含まれていないが、理論的な枠組みの検証をする際、必要な作業である。

教育の一部をなす留学生支援が、さらに発展し高等教育の新しい姿をつくるためには、研究者だけでなく、実務担当者による実践報告や研究、省察的な考察が必要だと考えられる。教育を効果的に提供する空間を支える留学生支援の進展のため、多様な関係者による議論が積み重ねられることを期待したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① 高橋彩、イギリスの大学における留学生支援—支援の現場から考える(特集論文)、北海道大学留学生センター紀要、査読無、第16号、2012、6-17
- ② ピーター・フィルコラ、カナダの大学における留学生のキャリア支援(特集論文)、北海道大学留学生センター紀要、査読無、第16号、2012、18-28
- ③ 青木麻衣子、オーストラリアの大学における留学生支援—各大学のオリエンテーションから「支援」のあり方を考える(特集論文) 北海道大学留学生センター紀要、査読無、第16号、2012、29-43
- ④ 高橋彩、留学生支援の枠組みを考える—むすびにかえて(特集論文)、北海道大

学留学生センター紀要、査読無、第16号、2012、44-50

(以上①～④北海道大学機関リポジトリ:

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/journals/index.php?jname=315&vname=5195>)

- ⑤ 青木麻衣子、オーストラリアの留学生受け入れ・支援における政府と大学の役割、留学生交流・指導研究、査読有、Vol. 14、2011年、63-74
- ⑥ 青木麻衣子、内田治子、オーストラリアにおけるファウンデーション・プログラム—留学生を対象とした予備教育の制度的枠組みと日本への示唆—、北海道大学留学生センター紀要、査読無、第15号、2011、40-62

(⑥北海道大学機関リポジトリ:

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/journals/index.php?jname=315&vname=5043>)

〔学会発表〕(計3件)

- ① 高橋彩、イギリスにおける留学生支援、北海道地区留学生担当教職員連絡会議プレセッション、2012年11月2日、北海道大学(札幌市)
- ② 青木麻衣子、オーストラリアにおける留学生支援、北海道地区留学生担当教職員連絡会議プレセッション、2012年11月2日、北海道大学(札幌市)
- ③ Aya Takahashi, 'Japanese language programs & other cultural and support programs', in Session: 'Study in Japan: recent developments in international education opportunities', EAIE, 15 September 2011, Copenhagen (Denmark)
発表の一部が、当科研費の成果にもとづくものである。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 彩 (TAKAHASHI AYA)
北海道大学・国際本部留学生センター・
准教授
研究者番号: 10326788

(2) 研究分担者

青木 麻衣子 (AOKI MAIKO)
北海道大学・国際本部留学生センター・
講師
研究者番号: 10545627

ピーター・フィルコラ (PETER FIRKOLA)
北海道大学・国際本部留学生センター・
准教授
研究者番号: 30301013